

## 基礎ゼミナールⅠにおいて学生の発言を促す試み

皆川 雅章

本学社会情報学部1年次前期科目である基礎ゼミナールⅠにおいて、議論の経験の乏しい新入生に発言を促す訓練を行なう試みについて記している。テーマ設定、ゼミナールの進行、ゼミ概要のまとめ文について、具体的方法と実施結果について説明している。

### 1. はじめに

筆者が2001年から2004年まで本学社会情報学部の1年次学生対象の前期科目、基礎ゼミナールⅠを担当した際に、学生達の発言を促すために試みた方法について述べる。2001年以前にも間接的に基礎ゼミナール（以下、基礎ゼミと略す）を担当する機会があり、輪読したテキストの内容について議論を行なうために、意見を述べることをもとめられて戸惑う学生の姿を度々見てきた。その時の経験から、少なくとも入学直後の1年次学生にとって、最初からこの形式のゼミを実施することは困難であり、筆者が担当する場合には他の方法を試みたいと考え、そのための方法を模索していた。そのような時、筆者が担当する3年次以降の専門ゼミ履修学生達と話しをする中で、彼らが「自分の得意な話題では生き生きと話をすることができる」ことに気づき、彼らにとって「身近で関心のある話題」を捜せば、本格的な「議論」にはならずとも「意見」を出させることはできると考えたのである。

本学部の基礎ゼミにおける様々な工夫と提言に関しては、これまでに紀要『社会情報』において4件の報告が行なわれている。森田他（1998）では、電子メールやプレゼンテーションツールの活用がゼミの活性化に寄与す

るかかどうかという観点で、講義を直接担当した4人の演習教育指導員（以下TAと略す）による試みと、専任教員森田による総括・提言が記されている。後藤他（1999）では5人のTAが、各々の創意工夫に基づいた試みの結果を、指導経験の記録として後任のTAに残すことを目的に記している。これら2つの報告はTAが通年で基礎ゼミを担当していた時期のものである。筆者もこの時期にTAが担当するクラスを巡回し、学生達の様子を観察する機会を持つことがあった。

2001年から、前期の基礎ゼミⅠを専任教員、後期の基礎ゼミⅡは専任教員とTAが担当する方式となった。

後期の講義の直接担当はTAである。井上・淀野（2004）は副題にもあるように「TA後期担当制以降の現状と課題」を述べたものである。この報告において、TAが各専任教員から「引き継いだ」学生達を指導する上での問題点の指摘が行われている。前期の「指導の履歴」がうまく引き継がれていないことに対する苛立ちが文面から読み取ることが出来た。これに関しては筆者自身も思い当たる点があり反省している。井上（2004）では、井上が基礎ゼミⅡの担当専任教員として、TAが直接担当している複数のクラスを統括する役割を持った時の問題点指摘が行なわれている。また、井上自身が前期に担当

した基礎ゼミ I の実施結果と、それに基づく考察が述べられている。この報告で井上が、「TA の間に基礎ゼミ I のことをもっと知っておきたいというニーズがあるようなので（中略）あまりうまくいかなかった部分も含めて包み隠さず述べることにしたい。私も他の教員の担当した基礎ゼミ I の様子には興味がある。これを機縁に伝えていただけたらと思う」と記している。本報告はこのような要請に応えるものとして位置づけることができる。

筆者が基礎ゼミ I を担当する上で理想とする到達目標点は、森田他（1998）で記されているように、「他人の意見を聞き、それを理解した上で自分の意見を述べる、というゼミ形式を早い時期に経験することによって、講義のみでは獲得しにくい能動的な学習姿勢を身につけさせる」ことであるが、上述したように、この目標を入学直後の 1 年次学生に適用することは困難であると判断し、現実的には「発言させるための訓練を行なう」ことを半年間での到達目標点とした。後期の基礎ゼミ II において、この訓練後の状態で「引き継いで」もらい、ゼミ形式の講義が本来目標としている到達点に近づけていってもらいたいと考えた。従って、その意味では、本報告は基礎ゼミ II 担当 TA への「指導の履歴を記した」引継ぎ報告でもある。

基礎ゼミ I 担当教員は、当該クラスの学生達が 3 年次になって専門ゼミに配属されるまでは、「クラス担任」の役割を担い、必要に応じて修学指導等を行なうことから、前期の間に教員と学生達との間の心理的な距離を小さくすることを心がけた。直接講義を担当するのは 1 年次前期だけであるが、それ以降も学内で見かけた場合には声をかけ近況を尋ねるなどのことを行なった。

基礎ゼミの具体的な実施に際しては、先行報告にあるような「テキスト購読型」、「自由テーマ型」のいずれにも属さない方法を試み

た。筆者の専門ゼミ指導等の経験に基づき、学生が一般的に関心を持ちやすく、発言しやすいテーマ選択を行い、議論の流れの筋道を教員から与えた。当日のゼミ実施結果のまとめを 400 字で書いたものを時間内に提出させ、そこから意見を抜粋し、次の週のプリントで公表した。なお、筆者の基礎ゼミでは授業時間中に携帯用ノート PC を使わなかった。その理由は 2 つある。1 つは、これまでの経験に基づいて言うならば、目の前に PC があると、学生達は説明中に Web ページ閲覧をしてしまうなど、注意力が散漫になってしまうからである。もう 1 つは「発言させるための訓練」に最初から必要な道具であるとは考えにくかったためである。ただし、「関心を持たせる」、「議論を活性化する」ための道具として有効活用する方法を模索する必要性を否定しているわけではない。

## 2. 試みの内容

2001 年から 2004 年まで、1 年次学生の前期基礎ゼミ I を担当した。クラスの規模は 15 名程度である。2004 年は 2 つのクラスを担当した。ゼミ教室は、この程度の人数をちょうど収容できる大きさで、長机をロの字の形に並べ、それを囲むように学生が着席する。

以下では、ゼミのテーマ設定で留意した点、沈黙の時間を作らないゼミの進行方法、授業の最後にかける「まとめ文」の役割などについて述べている。

### 2.1 テーマ設定

どのような題材を用いてゼミを行なうかは重要な問題の 1 つである。例えば、後藤他（1999）では「テキスト購読型」、「自由テーマ型」の 2 つを挙げ、それぞれの利点と欠点を記しており、前者の場合は「全員が興味を持つテキストを選択することは事実上不可能である」こと、後者の場合は「学生の興味の

維持が難しく、ゼミの雰囲気もだれたものになりやすい」といった問題点を指摘している。ここでは、いずれにも属さないと思われる方法を採用した。「自由テーマ型」では学生が各自でテーマを選ぶが、ここでは複数のテーマを教員が準備して1回に1テーマずつ与える。この4年間で使用したテーマは以下の通りである。

- ① 携帯電話は本当に必要か
- ② 漫画は社会の役に立っているか
- ③ 1冊の漫画を400字で紹介してみよう
- ④ 大学生活が持つ意味
- ⑤ 子は親の鏡?
- ⑥ TVゲームの功罪
- ⑦ 自分の職業観
- ⑧ 茶髪は不良? あなたはどう考える?
- ⑨ ここがヘンだよ大学生。外見ではないと言うけれど
- ⑩ 理想の大人像
- ⑪ これまでに影響を受けた人・言葉・体験
- ⑫ 宝くじで1億円当たったら、あなたは どう使う?
- ⑬ お金で買えないもの
- ⑭ 友情
- ⑮ 基本があれば1を100にすることだってできる
- ⑯ 基礎ゼミを通じて学んだこと

詳細を表1に示す。学生達に配布する資料には、ほぼこの表の通りに書かれている。どのテーマを使うかは、その年ごとのクラスの雰囲気や、ゼミ進行の途中経過を見ながら筆者が判断した。2003年以降、携帯電話や茶髪など、その時点で学生達にとって「当たり前」になっていると見なし得る話題に関しては取り上げなかった。本来のゼミの趣旨から言えば、「学生達にとって半ば常識化」している話題について様々な角度から議論を行い、疑問点を投げかけて議論を深めていくべきかも

しれないが、意見を述べさせること自体が課題となっている段階では、そのようなことは困難であると判断した。

テーマ選びの条件は、学生達にとって

- ① 予備知識の差が生じないもの
- ② 身近な話題で自分の言葉で語ることが出来るもの
- ③ 経験に基づいて語ることが出来るもの
- ④ 賛成・反対などの意見を言いやすいもの

を想定したつもりである。①は予備知識の差を埋めるために多くの時間を費やすことによって、ゼミ自体への学生達の関心が薄れていくことを避けるため、②、③は学生達がある程度「自信を持って発言できる」ようにするため、そして④はとりあえず何らかの意思表示が出来るようにするための条件である。

テーマを提示する際に、教員が図書や新聞記事などから抜粋した資料等を提供するという方法をほとんど採用しなかった。発言すること自体にまだ不慣れである上に、総じて読書経験の乏しい学生達にとって、抽象的な言葉で書かれた参考資料の内容に対して、限られた時間で理解し、何か根拠を持った具体的な意見を述べることを要求するのは非現実的であると考えた。少なくとも、何らかの準備や訓練を経てからでなければ、難しいと思われる。「言葉の意味の理解」でつまずいてしまうと、それ以降、考えることをやめてしまうという可能性もある。

また、1つのテーマをいくつかのサブテーマ(質問項目)に分けて提示した。この理由は、学生達が問題を切り分けて考え、答えやすくするためである。例えば、テーマ5で、「子は親の鏡と言われますが、あなたは どう思いますか」とだけ問いかけられたときの学生達の予想される意見は「思う、思わない」などの単発的なものになる可能性が大きく、

そこから議論を発展させることは難しいと考えた。

## 2.2 ゼミの進行

司会進行は基本的に教員が行なう。基本的な流れは

- ① 教員が1つのテーマを提示する
- ② そのテーマに関する具体的な問いかけに対して学生は意見を書き出し、順に発表する。
- ③ 教員は学生の意見に対しての問いかけを行なう
- ④ 学生は当日の議論について400字でまとめる

配布資料では、具体的な問いかけに「作業」という名称を使った(表1参照)。学生は作業の番号順に自分の意見を書き出していき、発表する。この発表前に書く時間を10分～15分程度与えた。ほぼ全員が書き終えた頃を見計らって発表を始める。「問題の整理」は学生達には要求されない。資料中の個々の質問に答えていくだけである。予め意見を書き出す理由は2つある。1つは学生達に「わかりません」、「考え中です」などと言う余地を与えないようにするためである。これを許してしまうと時間が無駄に経過してしまう。第二の理由は、学生達が「メモを取って自分の発言に備える」訓練をさせるためである。筆者が担当する3年次以降の講義において「話を聞きながら要領よくメモを取る」ことができない学生が増えてきたことに対する危機感もこの背景にある。「書きなさい」、「大事だからアンダーラインを引きなさい」と言われるまで、学生達が手を動かさない場面を、以前から専門科目の講義でもたびたび目にしてきた。高校までの受動的な学習習慣に基づくものであろうかと推測する。また、人前での発言が苦手な学生には「書いた通りに読めばよ

い」と説明し安心感を持たせた。このメモは配布資料中の空欄に書くが、これとは別に、その日のゼミの概要を400字でまとめたものを提出させた。「400字」と指定する理由は、指定された字数を埋める練習を繰り返し行なわせるため、そして、提出物の字数に個人差が生じないようにするためである。学生への動機付けとして「指定された字数で文章を書くことは将来、就職活動を始めたときにも、要求されるので、今から慣れておこう」と説明した。このまとめの作業は授業の後半で行い、字数が不足している学生にはその旨を指摘し、字数を充足するように指導した。400字のまとめから、その学生の文章作成能力、語彙、などの確認もできると考えた。(以下ではこれを「まとめ文」と呼ぶことにする。)

この「まとめ文」をもとに作成した資料を、次週のゼミの最初の時間に学生に交代で朗読させる。この資料には、上手にまとめた「まとめ文」を1, 2件、さらに「意見」として「まとめ文」から抜粋したものを掲載した。学生による「上手なまとめ」を載せる理由は、「学生どうしが互いに手本になる」ことを期待したからである。これは元札幌学院大学教授の勝井義雄氏が在職中に採用していた方法を真似させていただいた。

「文章を読んでもらう工夫」と題した説明文をゼミの初回に配布し説明している。この説明文の冒頭に「ここでは感動を与えるような文章を書く必要はない。自分の考えを、第三者に意図通りに正しく伝えれば良いのである。正しく伝えることに目的を限定すれば、特別な文才は必要なく、以下に記すような基本則に従い、論理的なつながりの表現パターンを活用することを繰り返し練習することで、読んでもらうための工夫になるはずである。」と記し、4つの基本則

- ① 記述を一般から詳細へ
- ② 関連する言葉は近くに置く

③ 文章は出来る限り簡潔にする

④ 必ず結論付けを行なう

と、論理的に文章をつなぐ表現のパターンについて、簡単な例を示した。この説明文を配布した理由は、単に学生に「まとめなさい」と言うだけでは、自由作文や感想文的なものになってしまう可能性が大きいからである。また、この程度の簡単な基本則であれば、学生達にも負担にはならないと考えたからである。

単に意見の下書きを順に読ませただけでは、発言の訓練にはならないし、この下書き自体が数行程度のことが多いので、あまりにも単調なゼミになってしまう。このような問題を解消するために、学生達が意見発表をする際に配慮した点は、教員が

- ① 発言を前向きに評価する
- ② 否定的なことを言わない
- ③ 発言に対してさらに問いかける
- ④ 他の学生にも問いかける
- ⑤ 聞き役に回り、学生に多くを語らせる

である。問いかけは学生の名前を呼びながら個々に行なう。尋ねる内容は同じであっても、「A君の意見は？」と尋ねるのと、「はい、次の人の意見は？」と尋ねるのでは、学生の受け取り方は大きく異なると考えるからである。また、「みなさんどう思いますか？」という方式の問いかけはほとんど行なわなかった。この方式では、学生が自分自身に対する問いかけと考えず、「誰かが答えるだろう」と「待ち」の状態に入り、意見が出るまでの無駄な時間の経過や、沈黙を通す学生の存在を許してしまう可能性があると考えたからである。ここでは複数のサブテーマについて一人ずつ答えるので、一度も口を開かない学生はいない。また、個人的な内容についてさらに問いかける場合には、予め「差し支えなければ答えてほしい」と伝えた。「言

いたくありません」と答える場合もあったので、学生達は各自の判断で許容範囲を決めていたと思われる。筆者は、沈黙の時間を作らないようにするため、学生が発した言葉から、いかに次の発言を引き出すかに腐心した。1つの方策は「発言を前向きに評価する」ことである。筆者は「面白い意見だね」などの励ましの一言は、学生の次の機会での発言につながると信じている。また、このことの裏返しになるが、否定的な表現を使うことも避けた。そのようなことを行なうと、それ以降、学生達が発言する意欲を失ったり、発言前に教員や他の学生の様子を伺うなどして萎縮してしまう可能性があるからである。また、筆者は出来る限り聞き役に回り、発言に対するさらなる問いかけ等を介して学生達に多くを語らせることを心がけた。改めて言うまでもないが、ゼミの主体となるべきは学生達である。

これまで記してきたことから明らかなように、学生達の発言は予め教員によって内容と流れがコントロールされ、教員が学生に質問を投げかけ、学生がそれに答えるというものである。理想を言っても、目の前の学生達を相手に実現できなければ意味がないと思うので、まずは強引に「口を開かせる」ことを意図した。学生による問題設定、司会、意見交換を教員側が理想として望むような形のできるようにするには、さらなる訓練が必要になると考えている。

## 2.3 「まとめ文」の役割

その日のゼミの概要を400字で書く「まとめ文」は、基本的には指定された字数の範囲で文章を書く訓練であるが、ゼミの時間内に発言できなかったことを記す場としての側面があり、この中に学生の本音と思われる意見が書かれていることが多かった。(勿論、学生がそれほど単純に本音を書くことはないのは理解しているつもりである。割り引いて考

える必要はある。この点は井上（2003）でも指摘されている。）これらの意見は次週にゼミ資料に掲載されるが、発言者の氏名は記載されないで、学生達から拒否反応は出なかった。無関心を装っている学生も、この意見だけは目を通して見えているように見えた。教員が書いたものではないので、「自分達のもの」として見ていたように思う。これを書くのは、ゼミの時間中に他の学生の意見を一通り聞いた後でもあるので、「まとめ文」の中に学生が自分の意見を入れることも容易だったと思われる。総じて、与えられた字数の範囲内でよくまとまっていた。この「まとめ文」で記されていることを、学生が意見として発言することが出来たなら、ゼミの質も格段に向上し、単なる「発言」から「議論」に発展する可能性を持つと考えられる。これに関しては後藤（1999）において青木が「報告書を書かせることにより、発表では言えなかったような自分の気持ちを書くことができたので、発表する訓練をもっとする事により、自分の気持ちを相手に伝えることが出来るのではないか」と同様のことを記している。

この「まとめ」に書かれている内容については、ゼミ中の学生の発表態度と関連付けて評価する必要がある。教員による評価を意識して「いいこと」を書いていると考えられる場合、言動が一致しない「言いつ放し」や「書き放し」となっている場合もある。

なお、「まとめ文」の提出は、その日の出席を兼ねている。遅延時間の許容範囲を超えらると思われる遅刻者には、提出用紙を渡さなかった。

## 2.4 漢字の書き取り

基礎ゼミの主旨から、はずれているとは思いますが、授業が始まる前に簡単な漢字の書き取りを行なった。内容は1回ごとに、「1字で××と読める字を書け」というもので、50字分のマス目を描いた用紙を配布し、そこに

思いつくものから順に書かせるというものである。使用した漢字は「こう」、「しょう」、「かん」、「とう」などの読みを持ち、該当する字の個数が多いものである。この書き取りを行なった目的は2つある。1つは、本学部への入学者層が多様になってきている中で、漢字の書き取り能力にどれだけのばらつきがあるのかを大まかに知っておきたかったからである。2つ目は、間接的な遅刻者対策である。学生が揃って授業を開始できる状況になるまでの間、出来るだけ「何もしないで待っている空白の時間」を作らないようにした。つまり、漢字の書き取りをさせながら学生が揃うのを待つのである。筆者の意図としては、「これから授業が始まる」という軽い緊張感を持たせようとした。この書き取りは成績評価に反映させていないので、講義の回を追うごとに学生達が漢字を書く姿勢もおおざらになる傾向が出てきた。

## 3. 結 果

実際に「まとめ文」に書かれていたことを参照しながら、実施結果を振り返ってみた。学生達は、自分の意見を述べることに抵抗がなくなれば、「自分達の経験と語彙の範囲内で主観的に述べることは出来る」ことがわかる。以下では17テーマの中から、4つのテーマを選んで実施結果の概要を記している。

### 3.1 学生の発言例

テーマ④「子は親の鏡？」では、学生達にとって最も身近な存在である「親」について、本人達の普段の行動と照らし合わせて意見を出させようと考え、「親からの影響」、「親の行動の評価」、「将来の自分」、を関連付けた質問を準備した。このテーマは「予備知識の差が生じず」、「身近な話題で自分の言葉で語ることが出来」、「経験に基づいて語れる」ものであると言える。これに対する学生達の意見は、「あらためて親のことを考える

と、なかなか意見が出てこなかった」,「親はいつも自分の行動が子どもに見られていることに気づいた」,「反抗期の頃は親が目障りでしかたがなかったが、今は尊敬できる」,「今は親の背中を見て育つ子供が少なくなっている」,「否定的な点はほとんどない」,「肯定したい点が見つからなかった」,「親の苦労を実感した」,「親の顔が見たいと言われるような子育てはしたくない」,「こういう機会は好きではないが、悪くはない」などである。このテーマを最初に使用したのは2001年である。このときの学生達からの意見には「身近な人を評価することへの責任感」からか、「言いつ放し」ではない内容が含まれていたように思う。神妙な顔つきで発言する学生も少なからずいた。このテーマを4年間続けて使用した。

テーマ⑥「自分の職業観」では、小さい頃に憧れた職業、フリーターの賛否、そして現実的にはなかなか起こりえない出来事(テレビドラマの主演への抜擢)を話題に入れながら、職業観に関して学生達の反応を引き出そうと試みた。得られた意見は「フリーターでもいいとは思いますが、親に悪い」,「どんな道を選んでも後悔しなければいい」,「職業に関して、年齢とともに現実的になってくる」,「このテーマを見て嫌だと思った」,「夢のためにフリーターをやるのも悪くない」,「子供の頃の純粋さがなくなってしまった」,「フリーターを肯定する意見が多くて驚いた」,「夢をあきらめることも大事だ」,「子供の頃の夢は所詮、憧れでしかない」などである。まだ大学入学直後であるので実感がわきにくいテーマであったが、彼らのこれまでの経験に基づいて、夢と現実の間で自分自身の将来についてぎこちなく語る学生達の姿は筆者にとって印象深かった。

テーマ⑩「これまでに影響を受けた人・言葉・体験」で得られた意見は、学生達のこれまでの人生が学校中心であったことから当然

とは言えるが、「教師」に関するものが多かった。「影響があるから誰かを尊敬し、努力する」,「ほんのささいなことでも、人に与える影響は大きいと感じた」,「中学・高校と、部活動で怒られたことは、今ではいい思い出」,「大会の結果によって態度を変えたピアノの先生は今でも許せない」,「受験で進路に迷っていたとき、テレビドラマの言葉に影響を受けた」,「高校3年のとき、本の言葉に影響を受け、もっと早く知ることが出来ればと思った」,「先生というのは、生徒を導ける力のある人だと学んだ」,「皆の体験や意見を聞いて、言葉による影響はすごいと改めて思った」,「憧れの人とは外見ではなく、いかに人に良い影響をあたえているかだ」,「看病をする母親の姿に学んだ」,「小学校の担任の言葉に、教師や大人をさめた目で見ようになっちゃった」,「部活の練習は辛かったが、先生のおかげで頑張れた」,「思春期の中高生は先生の影響を受けやすいと思った」などである。大人たちの言動に矛盾を感じながらも、それを面と向かって言うことが出来なかった苛立ちさがあったためか、これまでに学生達が出会った教師から「負の影響」を受けた体験について「まとめ文」に書いてくれたのは驚きであった。

テーマ⑪「宝くじで1億円当たったら、あなたはどう使う?」は日常欲しい思っているものは容易に買ってしまうほどの大金が手に入ったときに、学生達の関心がどのようなことに向くかを聞き出すことを意図した。また、学生達が自ら提示した使途について、「資料を調べる」という作業をこの段階から導入してみた。各自が調べた結果を資料としてまとめ、ゼミの時間に配布し、その内容を説明する。この課題では「趣味やスポーツなどで自分の世界」を持っている学生達からの意見が具体的であった。「本場でスポーツの修業をする」,「スポーツジムの建設する」,「個人図書館を建設する」,「留学する」,「世

界遺産めぐりをする」,「競走馬の馬主になる」,「本場のサッカー観戦をする」,「有名ブランド店の商品を全て買い占める」などである。比較的発表件数も多く一般的と思われたのは「家を建てる」,「車を買う」,「海外旅行をする」,「家族などに分配する」などである。「貧しい地域の人々に寄付をする」が2件あり,他のゼミ生達からは尊敬の念を持たれていた。あらかじめ社会問題に目を向けるように指示した上で,使途を考えさせると,このような意見は増えたのかもしれない。また,事前にテーマを伝えて考えさせておく方法もあったかもしれないが,このテーマは「身構えずにその場で思いつくこと」を述べさせた方が,その内容に本人らしさが出ると考えた。

ここで行なった資料調べは,それぞれの項目についての裏づけとなる金額を調べという単純なものである。例えば,個人図書館であれば,建物の建築費,購入可能な蔵書の冊数を調べ,本場のサッカー観戦であれば,チケット購入費,移動のための交通費,宿泊費を具体的に調べるなどのことを行なわせた。本人達が興味を持っていると述べたものについては,ふだんから情報収集し,知識が蓄積されていることを期待したが,「Web サイトで見つかったもの」をそのまま出してきた場合も多かった。2004年にこのテーマを扱ったとき,学生が「お金で買えない物」をテーマとして取り上げてほしいと要請してきた。これに基づいて作られたテーマが⑬「お金で買えないもの」と⑭「友情」である。

### 3.2 学生によるゼミ進行について

冒頭で「司会進行は基本的に教員が行なう」と書いたが,2001年と2004年の後半に,ゼミの雰囲気を見ながら学生達による司会進行を試みた。2001年には,「最後の4回分の講義時間で,学生が①司会進行,②サブテーマについて質問を考え,他のゼミ生から

回答を得る,の2つを行なった。進行方法について,学生に「いままでのやり方を真似てみよう」と説明した。「まとめ文」で得られた意見(感想)は,4回実施したなかで,前半では「人前で話すのは慣れているはずだったが,いざとなると頭がパニック状態になった」,「いつもと違い,個性的な意見は皆無で,どことなくぎこちない,重い空気だった」,「自分達で司会をしてまとめるのはけっこう難しい」,など,戸惑いを示すものが多かった。しかし,後半になると,「質問を考えるのは,どのような段階を踏んでいった方が答えやすいか,どう質問したら自分が意図することを聞きだせるかという考え応えのあるものだった」,「全体的に質問に対する答えは一言で終わり,質問が悪いと思った」などの意見が出始め,学生達は「自分達に何がもとめられており,何が不足しているか」を理解してきたと思われる。さらに後半では,「これからの講義やゼミに役立つと思う」,「このような場はもっと必要なのではないか」,「一番大切なのは慣れることだ」,「社会人になれば,こんなことは毎日続くと思う」といった意見も出ていた。

2004年は最終回に,学生にその場で思いつくテーマを出させ,司会を2名指名し,簡単な意見発表を行なわせた。司会者はそれまでの「まとめ文」の提出状況から判断して,筆者の要求を理解し,与えられた役割を果たせそうな学生を選んだ。2クラスのうち,1つ目のクラスは「生まれ変わったら何になりたいか?」,もう1つは「自分が今とは違う性に生まれたら何をしたいか?」というテーマが出された。この場合,発言したことが現実に起こる可能性はなく,「言いっ放し」のしやすいテーマであったせいか,学生達は思い思いに意見を出していた。この方式に関する意見は「初めてのパターンで面白かった」,「こういう議論もいいかもしれない」,「このやり方が一番みんなのためになると思う」,

「今回はいつもより明るいゼミだった」など、雰囲気の変化に反応した比較的単純なものほかに、「議論形式で進めていくには、自分がまとめる早さが必要だと思った」、「本格的な議論方式になれば、積極的な人と消極的な人との差がはっきり出てしまうので、そこをうまく消極的な人にも意見を出してもらえるようにするのも司会者の役目だと思った（司会の学生）」といった冷静なものもあった。

### 3.3 基礎ゼミに対する学生の意見

2004 年基礎ゼミ I 最後の「まとめ文」は基礎ゼミに対する学生の意見を書いてもらった。教員から見ると「活発な発言を行なわせる」までは至らなかったのだが、参加していた学生達はそれなりに得たものがあったようである。出された意見は、「高校の授業にはなかったので、新鮮だった」、「基礎ゼミを通じて、みんなの精神面は確実に成長していると思う」、「自分の意見を披露する訓練になった」、「反対意見から学び、自分も成長した」、「相手の意見を受け入れられるようになった」、「もっと小さな頃からこのような授業が出来れば、人間は変わると思う」、「このゼミは小・中・高でもやった方がいいと思う」などである。このような意見を総括すると、学生達にとって最も影響があったのは、「自分の意見を述べる」、「相手の意見を聴く」という、当り前のことについて経験を積む場が与えられたということではないかと思う。多くの学生たちにとって高校までは親や教師達から、彼らに向けて半ば一方的な意見を聴くだけのことが多かったはずである。少なくとも、このゼミの時間は「周りとは違うことを言っても大丈夫」だと学生達は思ったようである。

## 4. ま と め

まずテーマ設定についてである。前述したように、「身近で、予備知識なしで、誰でも

話せそうな」テーマ設定を行っている。発言を促すという点では一定の効果があったと思われるが、このようなテーマ設定方法で問題になるのは、潜在的に力のある学生達にとって、ゼミの進行に従って「内容が幼稚に見えてくる危険性がある」ことである。そのような学生達は、ゼミの話題には容易についていくことができるし、「まとめ文」を書くのもさほど困難ではない。このタイプの学生がゼミの議論を引っ張るようにする工夫が必要である。

1つのテーマをいくつかの質問項目に分けて提示し、各項目について順に答えさせて行く方式は、発言することに慣れさせるという点では効果があったと思う。これによって、ゼミに取り組む積極姿勢を育むことができたかどうかについては、筆者には評価出来ない。森田他（1998）において指摘されている「指導する側で、あまり詳細にゼミのやり方のルールを設定してしまうと、学生の方はそのルールさえ守れば良いという消極的な姿勢に陥りがちである」という点については、思い当たる部分があり改善を要すると考えている。

次に、「発言」の質の問題である。テーマ一覧からもわかるように、教員の意図が身近な話題を用いて「学生の意見を引き出す」ことにあるので、出てくる意見は主観的なものにならざるをえない。この点に関しては、前述の 3.3 節にも記したように、反対意見の存在によって、意見の偏りに対するバランスをある程度は取ることが出来たのではないかと考える。

「まとめ文」は、学生がゼミ時間中に言えなかったこと、あるいは、言いにくかったことを記す機会を与えたと考えている。教員から学生へのレスポンスとして、「まとめ文」と「意見」を配布資料に記し、講義の時間に学生達に読ませたことは、学生達に参加意欲を持たせるために、ある程度は効果があった

と思われる。

## 5. おわりに

基礎ゼミⅠでの4年間の取組みについて記した。これまでに合計で5つのクラスを担当したが、同じテーマを提示してもクラスによって全く反応が違ってくるのがわかった。先行報告でも指摘されているように、教員間で基礎ゼミ指導のノウハウを公開、蓄積し、状況に応じて使い分けるといったことが現実的なところのように考える。

筆者は最初から先行報告を意識して今回の試みを行なったわけではないが、改めて本稿の参考文献を読むと、同じような経過をたどっているようにも思える。基礎ゼミの教育効果を高めるために教員・指導員間で「共有できる」経験と試みを抽出すべきなのかもしれない。

冒頭で記した基礎ゼミの獲得目標を達成する努力のほかに、クラス担任としての基礎ゼミⅠ担当専任教員に要求されていることは、まず彼らの可能性を引き出すために「学生達の心の中に入っていく」ことであるように思える。早い段階に「顔と名前を一致させる」ことは当然のこととして、基礎ゼミを担当しない後期でも、前期に担当した学生の顔をみかけたら、教室外でも声をかける努力はすべきではないだろうか。間接的であっても、学びの場に学生達を適応させるために、専任教員はTAには出来ない役割を果たすことが

出来るはずである。

この試論で記したことは、筆者のこれまでの経験に基づいて、言わば「自己流」で行なった講義方法とその実施結果である。従って、結果の評価も主観的なものになってしまっている点は否めない。この試みの評価は後期で基礎ゼミⅡを担当されている教員及びTA諸氏に委ねたい。関係諸氏のご意見、ご批判、ご助言をいただければ幸いである。

## 参考文献

- 森田彦・吉野巖・後藤靖宏・竹田唯史・高橋哲男  
(1998)「社会情報学基礎ゼミナールにおける取組み」『社会情報（札幌学院大学社会情報学部紀要）』Vol.7, No.2: 29-45
- 後藤靖宏・広瀬健一郎・大谷直史・青木一真・加藤克 (1999)「大学教育におけるゼミナールのあり方と指導者の役割—1998年度社会情報学基礎ゼミナール指導の報告と今後への提言—」『社会情報（札幌学院大学社会情報学部紀要）』Vol.8, No.2: 1-26
- 井上大樹, 淀野順子 (2004)「基礎ゼミナールⅡにおける学生の「学び」(I)—TA後期担当制以降の現状と課題—」『社会情報（札幌学院大学社会情報学部紀要）』Vol.13, No.2: 109-124
- 井上芳保 (2004)「大学教育における「学び」の基本を培うために—基礎ゼミナールの担当教員としての経験を中心に—」『社会情報（札幌学院大学社会情報学部紀要）』Vol.13, No.2: 125-138

表 1 基礎ゼミナールテーマ一覧

1	<p>「携帯電話は本当に必要か？」 (2001 年, 2002 年)</p> <p>作業 1 : 自分がどのような用途に携帯電話を使っているかを列挙する.          作業 2 : 社会一般的に考えて携帯電話が役に立っていると考えられることを列挙する.          作業 3 : 携帯電話がなくても済むと思われる場合, あるいは携帯電話の使用が問題となる場合を列挙する.          作業 4 : 意見交換          作業 5 : 携帯電話が本当に必要かどうかの結論を出す.              1. まず, 自分の意見を明らかにする.              2. その意見の根拠となる理由を 3 つ挙げる.          作業 6 : 課題用紙に本日の議論の内容をまとめる.          注) テーマが何であり, どのような議論が行なわれ, どのような結論が得られたかを順序立てて書くこと.</p>
2	<p>「漫画は社会の役に立っているか？」 (2001 年)</p> <p>作業 1 : これまでに自分が熱中した漫画のタイトル, ストーリー, どのようなシーンや言葉に『ワクワク』したか, そして, その理由を列挙してみる.          作業 2 : どのような場合に, 文字よりも漫画の方が情報を伝えやすいかを列挙してみる.          作業 3 : 若者の『活字離れ』は漫画が原因だろうか?          作業 4 : 『漫画は思考力を低下させる』という指摘に対して, 自分自身はどう考えるか?          作業 5 : 漫画ばかり読んでいる場合と, 『テレビ』の娯楽番組ばかりを見ている場合とを比べて, どちらが思考力に影響を与えようとするか?</p>
3	<p>「1 冊の漫画を 400 字で紹介してみよう」 うまく伝わるだろうか? (2001 年)</p> <p>作業 1 : 以下の点を列挙して整理する.              (1) どのようなことを題材にしたものか(スポーツ, 学園生活, 歴史, 幻想的な世界…).              (2) 登場主人公の名前とその特徴(性格).              (3) 典型的なストーリー(オチのパターン).              (4) 自分が読んで面白いと思う理由.          作業 2 : 上記の(1), (2), (3)の順に 400 字で概要をまとめる(課題用紙 1).          作業 3 : ゼミ参加者に読んで聞かせる.          作業 4 : 参加者から質問を受ける.          作業 5 : 課題用紙 2 に議論の概要をまとめる.</p>
4	<p>「大学生活が持つ意味」</p> <p>作業 1 : 以下の点に関して, 自分の意見をまとめる              (1) 自分が大学に進学していなかったら, 今頃は何をしていただろうか?              (2) 高校生活と大学生活を比べて違うと感じることは何だろうか?              (3) 大学生は社会的に「自己管理ができる一人前の大人」として扱われることが多い. これに対し, あなたは肯定的, 否定的, いずれの立場を取るか? その理由は?              (4) 自分自身で理想とする大学生活 4 年間とはどのようなものだろうか? 世間一般の考え方ではどうだろうか?          作業 2 : 上記の(1)~(4)をゼミ参加者に読んで聞かせる.          作業 3 : 参加者から質問を受ける.          作業 4 : 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>
5	<p>「子は親の鏡？」 (2001 年, 2002 年, 2003 年, 2004 年)</p> <p>作業 1 : 以下の点に関して, 自分の意見をまとめる.              (1) 自分の行動や考え方が親と似ている(あるいは影響を受けている)と思う点を挙げる.              (2) 親の考え方や行動に関して肯定的に考えたい点, 否定的に考えたい点を挙げる.              (3) 自分が親になったときに, 自分の親から引き継いで子供に伝えたい点              (4) 「親の顔が見たい」と思うのはどんな場合?          作業 2 : 上記の(1)~(4)をゼミ参加者に読んで聞かせる.          作業 3 : 「子は親の鏡」と思えるかどうかについて結論を出す.          作業 4 : 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>

6	<p><b>「TV ゲームの功罪」 (2001 年, 2002 年)</b></p> <p>作業 1 : 以下の点に関して, 自分の意見をまとめる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) TV ゲームに「ハマる」理由は何だろうか?</li> <li>(2) 子供が TV ゲームに熱中しすぎると, 「外に出て遊ばなくなる」, 「人付き合いが苦手になる」, 「本を読まなくなる」, 「残酷な出来事に対して鈍感になる」という批判があったとする. これらに対してあなたはどうか考える?</li> <li>(3) TV ゲームは直接的あるいは間接的に社会の (あるいはもっと身近には我々の) 役に立っているだろうか? その理由は?</li> </ol> <p>作業 2 : 上記の(1)~(3)をゼミ参加者に読んで聞かせる</p> <p>作業 3 : TV ゲームは社会に役立っているかどうかについて, 各自で理由を 3 つ示して, 結論を述べよ.</p>
7	<p><b>「自分の職業観」 (2001 年, 2002 年, 2003 年, 2004 年)</b></p> <p>作業 1 : 以下の点に関して, 自分の意見をまとめる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 小さい頃に憧れた職業と, 憧れた理由 (複数可).</li> <li>(2) 自分はどのような職種 (具体的な職名でなくてもよい) に向いていると思うだろうか? その理由は?</li> <li>(3) 「大学の 4 年間で就きたい職業が見つからない場合にはフリーターでもかまわない」という考え方について, あなたは肯定的, 否定的いずれの見方をするだろうか? その理由は?</li> <li>(4) 友人がたまたま応募書類を出してくれたテレビドラマの主演のオーディションに受かってしまったが, このときあなたは大学 4 年生ですでに銀行に就職が内定していると仮定する. 職業としてどちらを選ぶだろうか? その理由は?</li> </ol> <p>作業 2 : 上記の(1)~(4)をゼミ参加者に読んで聞かせる.</p> <p>作業 3 : 参加者から質問を受ける.</p> <p>作業 4 : 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>
8	<p><b>「茶髪は不良? あなたはどう答える?」 (2001 年, 2002 年)</b></p> <p>作業 1 : 以下の点に関して, 自分の意見をまとめる</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 中学校や高校で, 生徒が茶髪にすることを禁じる理由は何だろうか?</li> <li>(2) 茶髪にしてみたいと思うきっかけにはどのような場合があるだろうか?</li> <li>(3) あるホテルが結婚式の宴会係のアルバイトを募集し, 茶髪の大学生達が応募してきた. ホテル側は「髪を黒くしないと雇わない」と伝えたところ, 学生達は「そこまでして, このアルバイトをする気はない」と応募を辞退した. ホテル側と学生側, それぞれの言い分の根拠を整理してみよう.</li> <li>(4) 就職活動での苦労の末に入社した憧れの会社で, 研修を終えた入社 3 ヶ月後に茶髪にしたところ, 上司から「ウチの会社はお客様第一の信用商売なので茶髪は好ましくない」と言われた. あなたはどう答える? そのように答える理由は?</li> <li>(5) あなたは茶髪に対して, ①全面肯定, ②条件付き肯定, ③全面否定のいずれの立場を取るだろうか. 条件付き肯定であるとするなら, その条件は何だろうか?</li> </ol> <p>作業 2 : 上記の(1)~(5)をゼミ参加者に読んで聞かせる.</p> <p>作業 3 : 参加者から質問を受ける. 全体の意見分布をまとめる.</p> <p>作業 4 : 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>
9	<p><b>「ここがヘンだよ大学生. 外見ではないと言うけれど…」 あなたはどう考える? (2001 年, 2002 年, 2003 年, 2004 年)</b></p> <p>大学生の行動に関して, 以下のような批判があることを想定し, ゼミ内での意見を集約して, 批判に対してどのように答えるかを結論付ける. 「周囲の意見を聞いても確かにそうである」, 「そんなことはない. 偏見であるとの意見が大多数であった」など, いろいろな結論付けがありうる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 校舎の廊下で大声で話す.       <ol style="list-style-type: none"> <li>① 叫び合っているようにも感じる. そんなに大声を出さなくても聞こえるのではないだろうか.</li> <li>② 授業中の教室のそばでもおかまいなし.</li> <li>③ 聞こえてくる話しには, さほど中身があるようにも思えない.</li> </ol> </li> <li>(2) 集団で地べた座り       <ol style="list-style-type: none"> <li>① 廊下に座られては通行の邪魔になる. 他人の迷惑を考えてほしい.</li> <li>② とてもカッコいいとは思えない.</li> </ol> </li> <li>(3) 校舎の床にタバコの灰を落とす, 吸殻を棄てる       <ol style="list-style-type: none"> <li>① 掃除してくれる人の気持ちを考えたことあるの?</li> <li>② 焦げたタイルは夏休みに人手 (= お金) をかけて貼りかえるんだよ.</li> <li>③ 授業料で維持されている自分達の校舎だよ.</li> </ol> </li> </ol> <p>作業 1 : 「他人の頭を使って考える」ための質問項目を 3 個考える</p> <p>作業 2 : ゼミ内で質問をして回答をもらう.</p> <p>作業 3 : 意見を集約して, 結論付けを行ない, 課題提出用紙にまとめる.</p>

10	<p><b>「理想の大人像」 (2002 年, 2003 年, 2004 年)</b></p> <p>本日のテーマ:「理想の大人像」</p> <p>作業 1: 以下の(1)~(4)に関して各自の意見をまとめる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 高校生活と大学生活を比べて違うと感じることは何だろうか?</li> <li>(2) 大学生は社会的に「自己管理が出来る一人前の大人」として扱われることが多い. これに対し, あなたは肯定的, 否定的いずれの立場を取るか? その理由は?</li> <li>(3) 今の大人達はどのような点で子供達に良い手本を示しているだろうか, あるいは示していないだろうか. それらの点について自分達が大人になったときには, どの程度実行できるだろうか. 実行できない点があるとすれば, その理由は何だろうか.</li> <li>(4) 自分達で考える「理想の大人像」とはどのようなものか.</li> </ol> <p>作業 2: 上記の(1)~(4)をゼミ参加者に読んで聞かせる</p> <p>作業 3: 「理想の大人像」について結論を出す.</p> <p>作業 4: 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>
11	<p><b>「これまでに影響を受けた人・言葉・体験」 (2001 年, 2002 年, 2003 年, 2004 年)</b></p> <p>これまでに, 自分の生き方や考え方に対して影響を受けたと思われる人や言葉, 体験を思い出してみよう. その人に会うことがなければ, その一言を知ることがなければ, あるいはその体験がなければ, 今とは違った生き方をしていたかもしれないという場合はあっただろうか. 影響を受けたとすれば, それは何故だったのだろうか.</p>
12	<p><b>「宝くじで 1 億円があたったら, あなたはどう使う?」 (2002 年, 2003 年, 2004 年)</b></p> <p>何気なく買った宝くじで 1 億円があたってしまった, あなたならばどう使うだろうか? 10 年以内に使いきるものとして, 具体的な支出項目と金額, なぜそうするかも述べること. (全額貯金するという選択肢は除く.)</p>
13	<p><b>お金で買えないもの (2004 年)</b></p> <p>作業 1: 以下のテーマに関して, 各自の意見をまとめる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) これまでに「お金で買えない経験」をしたことがあっただろうか. あったとすれば, なぜそう思えるのだろうか?</li> <li>(2) 人の心(気持ち)はお金で買えるのだろうか? それはどの程度までだろうか?</li> <li>(3) 決してお金では買えないものは何があるだろうか?</li> </ol> <p>作業 2: 上記の(1)~(3)をゼミ参加者に読んで聞かせる</p> <p>作業 3: 課題用紙に本日の議論の概要をまとめる.</p>
14	<p><b>友情 (2004 年)</b></p> <p>以下の文章は、『スラムダンクな友情論』(齋藤孝著, 文春文庫)からの抜粋である. それぞれの文章について, 各自の意見を述べて発表し, 全体の意見をまとめよ.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 友だちのよさは, いちいちすべて言葉にしなくても分かり合えるということだ. それまでにたくさんのことを話し, 共有する体験も多くあれば, いちいち説明しなくても分かり合える部分も多い.</li> <li>2. みんなが夢を実現できるとは限らないけど, 同じ日々を仲間と生きた実感は, 人生のいろんな局面での力になるんだと思う.</li> <li>3. 人と一緒にいることができることと, 一人でいられること. この二つの力はからみあっている.</li> <li>4. 以前, 「自分にとってのクリエイティブな関係」というのを学生たちに書いてもらったことがあるけれど, たいていの人は「その友人がいて今の自分がある」とか「その人が自分刺激してくれている」という関係の経験を持っていたし, そこに男女差はまったくなかった. 互いが心の中にいてか「向上心を刺激し合う」のが友情の関係だ. 人生の最終章で, 「長いこと, ばくの中にいてくれてありがとう」と言える友をもてることは, 最高の幸福だろう. 互いに高め合い, 新しい何かをお互いのあいだに生み出すような関係がクリエイティブな関係だとすれば, 友情こそが「クリエイティブな関係」の核心だ.</li> </ol>
15	<p><b>友情 (その 2) (2004 年)</b></p> <p>以下の項目について各自の意見を述べる.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 「知り合い」から「友人」になるきっかけにはどのようなことがあるだろうか?</li> <li>(2) あなたが「友人」と呼べる人は何人いるだろうか. (タイプ分けしてもよい.)</li> <li>(3) 「困ったときにいてくれる友が最良の友」という言葉がある. この言葉を実感するような経験が過去にあっただろうか?</li> <li>(4) 自分自身で「友情とは何か」を定義してみよう.</li> </ol>

16	<p><b>基本があれば 1 を 100 にすることだってできる (2004 年)</b></p> <p>「基本があれば 1 を 100 にすることだってできる」 (サッカーにとって大切なことは何か、と尋ねられて)</p> <p>日本が長い間韓国に勝てなかった理由は「精神的な弱さ」だと言う人は多い。確かに韓国は日本を相手にする時、猛烈なエネルギーを放出し「お前らにだけは負けない」という気持ちを顔や態度に表わしていた。その絶大な威圧感は、日本選手を必要以上に怯えさせた。韓国は本当に強かった。精神面だけでなく 90 分間走り続ける体力があり、速攻を仕掛ける戦術と個人の技術があり、正直に言って、実力で日本に勝っていた。</p> <p>中田がこう言ったことがある。「韓国や中近東の国に日本は勝てないって言われますけど、負けるってことは、こっちが下手だってことでしょう。相手がどんなに張り切ってガンガン来たって、ゆうゆう振り切る力があれば問題ないわけだし。敵に勝る技術がないから勝てないんで、勝つためには技術で上回る以外ない。要はテクニックを身につけていけば結果に繋がるんだと思うけど」</p> <p>サッカーの技術とは何なのか。彼が考えているサッカーは実にシンプルだ。「足でボールを蹴り、コントロールして、目指した場所へ蹴る。ただそれだけのこと」</p> <p>では、どうすればどの技術が向上するのか。答えは簡単だった。「ミスをするから相手にチャンスを与えることになる。そのミスをしないのが一番大切なこと。確実なプレーが出来るようにするには、練習するしかないけどね」</p> <p>中田が「練習を嫌いだ」というのは、事実だ。けれど、練習が必要なことだけは小学生時代から痛切に感じてきた。練習をして技術を磨かなければ勝てないことを知っていた彼は、嫌いな練習も進んでやった。「派手で美しいプレーを見せようと思ったら、地味な練習を死ぬほどしないと。基本があれば 1 を 100 にだってできるんだから。基本がない選手はいつか消えていくでしょう」</p> <p>練習でいちばん時間を割いているのは、最も地味な対面パスだ。「ふたりで一組になって、パスを出し合う練習。何度も何度も繰り返すこと。これが重要です」</p> <p>しかし、何も考えないで蹴るだけでは、進歩はない。「足のどの部分で、どれくらいの力で蹴ると、どういうパスになるのか。頭の中にインプットしながら蹴らなきゃ駄目」</p> <p>それと同時に、自分がどういうボールを蹴るのか、しっかりイメージするのだ。「球質や緩急など、イメージしたボールと同じボールを蹴れるまでパスを繰り返す。そうやって練習して、ある程度ちゃんとしたボールが蹴れるようになると、いちいちボールに視線を落とさなくてもパスを出せるようになる」</p> <p>実際、彼はチームでもこの基本練習に多くの時間を費やす。同じ相手と何度も何度もパスを交わしている。見ている者が飽きてしまうほどの単調なボールのやり取りに、一瞬たりとも気を抜く気配がない。「この基本技術が、一瞬のチャンスをものにするよね」</p> <p>それが終わるとフリーキック、ゴールの練習へと続く。「ボールにドライブをかけて、右や左に曲げるためにはどうすればいいのか、確認しながら蹴ってみる。誰かに教わっても、自分の体が覚えなければ、すぐに忘れるだけだから」</p> <p>試合中、絶妙なスルーパスやハーフウェイラインからのロングパスは、観衆を熱狂させる。中田のパフォーマンスは、幾度も幾度も繰り返されるパスの練習に支えられていることを忘れてはならない。</p> <p>(『中田語録』；中田英寿言、小松成美編著；文春文庫；1999 年)</p> <p>以下について意見を述べる。</p> <p>(1) これまでの経験で「基本があれば 1 を 100 に出来る」と思えることは何だろうか？</p> <p>(2) 自分自身が、大学生活を通じて得るべき「1 を 100 にするための基本」は何だろうか？</p>
17	<p><b>基礎ゼミナールを通じて学んだこと (2004 年)</b></p> <p>以下について各自の意見を記し、発表する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基礎ゼミナールのテーマで最も関心を持ったものは何だったろうか？ それは何故だろう？</li> <li>2. ゼミの場で自分の意見を述べることに抵抗感はあっただろうか？</li> <li>3. 人それぞれ違う意見を持ち、互いにそれを尊重すべきであるという意識を持つことは出来ただろうか。</li> <li>4. 予め与えられた問いに関して下書きし、それを発表する方法から、「お互いに意見を交換しあい議論を進めていく」にはどのようなことが必要だろうか？</li> <li>5. 基礎ゼミナールを通じて学んだことは何だったろうか？</li> </ol>